

園における幼児教育アドバイザーの活動事例の分析

○天野美和子

(東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター)

1. 問題と目的

文部科学省において2016年から着手された「幼児教育の推進体制構築事業」の取組の一つである「幼児教育アドバイザー¹⁾」が担っている役割の具体的な内容は、園への巡回訪問による助言や情報提供、園内研修の講師、幼保小連携の支援、保護者対象の支援、保育者の個別相談、園長・施設長の個別相談、園の取組への助言、自治体が行う研修等の講師や支援等、多岐にわたっている(文部科学省, 2018)。これらは、いずれも幼児教育の質の向上のための取組であると考えられるが、当初想定されていた以外の役割をも含みこまれるようになり、「幼児教育アドバイザー」(以下、アドバイザーと略記)は多様な文脈で、いかようにも解釈できる存在となった(高島, 2018)。筆者は、アドバイザーが園を巡回訪問した際に、その園の保育を外部の視点から捉えて観察し、その観察で得られた内容を基に保育者らと協議する機会や場をつくる一連の関わりが、その園の幼児教育の質の向上に寄与するのではないかと考える。

そこで本研究では、多岐にわたるアドバイザーの活動の中でも、巡回訪問時のアドバイザーによる保育観察場面に着目する。そして、経験知や専門分野が様々なアドバイザーらが幼稚園、保育所、認定こども園を訪問し、実際にどのような保育の観察をしているのかについての場面の事例を分析し、園におけるアドバイザーの役割について検討することを目的とする。

2. 方法

本研究は、2018年8月から2019年11月の間に、園への巡回訪問を行ったアドバイザーに同行し(本研究の調査者である筆者と、もう1名との計2名)、アドバイザーの活動を観察した。観察データは、フィールドノート、写真、ビデオにより記録した。協力園は、群馬県内のG幼稚園(公立)、静岡県内のS保育所(公立)、熊本県内のK保育所(公立)、福井県内のH幼保連携型認定こども園の計4園であった。これらの園が属する自治体はいずれも、アドバイザーが園への巡回訪問を継続的に行うことを大切にしており、アドバイザーの育成や養成にも非常に力を入れている。この調査協力園の選出については、事前に各自治体担当者に依頼し、園やアドバイザーのスケジュールや調査のための観察への協力の可否等を総合的に検討してもらったうえで選出してもらった。なお、筆者らの観察は、保育やアドバイザーの活動を妨げないよう配慮した。

3. 結果と考察

3-1. G 幼稚園(群馬県内の公立)

訪問日:2018年9月13日

訪問したアドバイザーの人数:3名(各アドバイザーの経歴は、保育者養成大学教員、元療育施設長、元保育士)
スケジュール:登園から降園までの保育観察をし、午後から分科会、全体会の実施。



写真1: コウモリの赤ちゃんに興味をもつ子どもたち

用務員さんが木の手入れ中に見つけたコウモリの赤ちゃんを虫かごに入れて園庭の子どもたちに見せに来てくれた場面。珍しいコウモリの赤ちゃんに興味深々の子どもたちの様子を2人のアドバイザーが見守っている。「毛が生えてるね」という子どもの呟きも見逃していない。

3-2. S 保育所(静岡県内の公立)

訪問日:2018年8月30日

訪問したアドバイザーの人数:1名(静岡県内の公立保育所の退職園長)

スケジュール:午前中、全クラスの保育観察をし、午後から分科会、全体会の実施。



写真2: 1歳児、2歳児のフィンガーペインティング



写真3：3歳児のフィンガーペインティング

写真2、写真3でのアドバイザーは、フィンガーペインティングをしている子どもたちの様子を、少し離れた位置から観察し、保育者や子どもの様子を写真に撮っている。アドバイザーは、この保育観察中にさて英下子どもの様子や環境の写真を午後の園内研修の素材に用いていた。

3-3. K 保育所(熊本県の公立)

訪問日:2019年2月26日

訪問したアドバイザーの人数:1名(熊本県の公立幼稚園の退職園長)

スケジュール:この日は午前中、年中クラスの保育観察をし、午後から全体会の実施。



写真4：うんていに挑戦している4歳児

写真4の子どもたちは、うんていに興味を示しているものの、まだ両手でぶら下がることが精いっぱいである。そこにアドバイザーが寄り添いつつ、子どもたちの挑戦を見守っている場面である。

3-4. H 認定こども園(福井県内の私立)

訪問日:2019年11月5日

訪問したアドバイザーの人数:2名(私立幼稚園の元副園長、元保育士)

スケジュール:この日は全クラスの保育観察をし、午後から園内研修の実施。



写真5：どんぐりを転がすためのコースづくり(年長)

壁に立てかけた状態で作っているため、紙で作ったコースをテープで固定するときには一人ではできず、誰かと協力する必要がある。自分一人では出来ないと気づいた子どもが、どのようなアイデアを思いつくのかを興味深そうに見守っているアドバイザーの姿が見られた。



写真6：どんぐりで遊ぶ1歳児

アドバイザーは、子どもたちが小さな手でどんぐりを一つずつ掴み、紙皿や紙コップに入れて遊んでいる様子を見守っている。ままごとでどんぐりを料理に見立てているのか、「どーぞ」と言いながら親しげにアドバイザーに手渡し子どもの姿がみられた。アドバイザーは、1歳児が遊ぶのに適したどんぐりの大きさや、保育室の環境整備についても助言している様子が見られた。

4. まとめと今後の課題

本稿で取り上げた4つの事例では、どのアドバイザーも、幼児期の子どもの保育実践の経験知が豊かだったこともあり、保育観察においては、保育者の視点から非常に丁寧に具体的に子どもたちの様子を見取り、その後の分科会や園内研修に繋げていた。今後は、アドバイザーのこのような関わりが、実際に園の保育をどのように向上させていくのかを継続的に見ていく必要がある。

註

1) 幼児教育の専門的な知見や豊富な実践経験を有し、域内の幼児教育施設等を巡回、教育内容や指導方法、環境の改善等について指導を行う者のこと。